

# 東方短編集

八連装豆鉄砲

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オリキャラや独自設定・独自解釈も盛り込んだ短編集です。

# 目次

深く遠い記憶の底で | 1

人里住まいの一般女性のひととき

4



# 深く遠い記憶の底で

意識が深い闇からゆっくりと浮かび上がる。

目を開けると見馴れた屋敷の薄暗い行灯の灯る自室の天井が視界に映る。

まだ気だるい身体を起こし、背後にある枕に目をやる。

枕は涙に濡れていた。

「またか・・・、」

私は毎年のように冬眠するが、いつからであっただろうか、もう千年以上も前から冬眠から目を覚ますと枕を涙で濡らす様になった。

多くの人妖にとって古い記憶は『曖昧』なものが多いであろう。永い時代を生きる神々や妖怪などはそれは顕著であり、ましてや最も古い記憶など言うまでもない。

私の最も古い記憶は、ただひたすら『泣き続けていたこと』

何故泣いていたのか、それは私には分からない。

同じ種族のいない私には勿論だが親と呼べる存在は無い。

だから、孤独に耐えきれず泣いていたのかもしれない。

何処へ行っても人間にはこの能力の為に忌み嫌われる、妖怪には神にも等しいこの能

力欲しさに追われるのみであった。

私を守ってくれる者など存在するわけもなく、まだ扱いに慣れない能力で覗き見る他人の妖の家庭の暖かさを羨んでいたこともある。

だが、本当にそれだけであろうか？

冬眠から目覚めた時、毎年涙に濡れた枕を見て同じような感情に襲われる。

孤独感だけではない。何故か恋しく、懐かしい夢を見ていて、言い様の無い『喪失感』と『後悔』の様な感情に胸を痛めつけられている。

私は冬眠中、一体どういう夢を見ているのだろうか。

それが気になり覗こうとしたことは幾度とある。

だが、見ることができたことは一度として無い。

能力を用いてあらゆる方向から覗こうとして来た。

私は能力を使って他人のに限らず私の記憶や夢を覗いたり入り込んだり、時には弄つたりもする。

だが其処だけは決して覗くことすらできないのだ、まるで其処に固く鍵が掛けられているように。

一体其処に何が、どのようなモノが封印されているのだろうか。

何を喪ってしまったことに対する喪失感なのか。

どういったことをしてしまつたことに対する後悔なのか。それを知る術は無い。

毎年のように私は冬眠から目覚めた刻こういつた思考の渦に嵌まる。

雪見障子の硝子の向こう側には雪の残る庭園が映る。

自室の嚴重な結界を解除し寝起きの重い身体を起こし布団から出て、障子を開け縁側へと出る。

池の脇に佇む老木の梅がちらほらつぼみを開き始めている。

どうやら今年は少し早めに目覚めたようだ。

春の足音が近寄つて来ているとはいえ、まだ雪の残る季節である。寒風に悴む手にはあと白い息をあてる。

ふと、目を横へと向けると、其処にはいつの間にか忠実な九尾の式が跪いて控えていた。

「お早うございます、紫様」

「お早う、藍」

また、長く短い一年が始まる。

# 人里住まいの一般女性のひととき

## 幻想郷

とある妖怪の賢者を発起人に築かれた『忘れられたものの楽園』である。外の世界から幻と実体の境界で境界を引かれ凡そ千年、博麗大結界を以て完成に隔たれ百余年、何度か大小様々な異変を繰り返しつつもある程度の平和の中に幻想郷の人妖達は過ごしている。

そんな幻想郷の人間の住む集落の中でも最大の人里の表大路から離れた小路の一角に小洒落た喫茶店がある。外の世界ではもうほとんど目にすることはなくなった和洋折衷な佇まい、その店内のカウンターには常連となって久しい女がコーヒーを嗜みながら天狗の書いた新聞を読んでいた。



某の新聞曰く、先の幻想郷内に神霊を溢れさせた異変の主犯は古いにしえの摂政である聖徳太子の復活を目論んだものだと書いてある。かの十七条の憲法でこの日ノ本に仏教を揚げた張本人であるかの皇子が、不死身を望んで道教に傾倒していたとは、かの邪仙からかつて聞いた際には何とも滑稽な与太話だと思つたが、今になって聞けば日ノ本におい



ていずれ仏教が限界に達すると想定していたらしく、いずれ仏教が廃れた世の中に聖人として再来する魂胆だったと。実際は後に伝わった台密・東密等を始めとした新しい思想も含め日ノ本古来の神道・更に一部の道教思想もまとめて習合され千年以上も信仰を受けていた。明治以降の外界については文明開化だの国家神道だの廃仏毀釈だの訳のわからないもので信仰そのものが吹っ飛んだため言わずもがなである。

思えば大結界を熱烈に支持したのも山の天狗達であつたか……。明治の廃仏毀釈、アレはいわば新政府黙認の国家規模略奪・破壊・迫害運動であり、それこそ外界のタリバンも真つ青になる程であろう。なんとも罰当たりである。天狗達はその流れが幻想郷まで及ぶのを危惧し恐れていたのだろう。新政府によつて修験道までもが禁止され尻に火が着いた天狗達は全国に散らばつていた拠点を引き払い、元々天魔の座していた八ヶ岳に大挙して移り住んで来た。いわば都落ちだな。まあ、流石にそこまで言つてしまえば天魔が怒り狂うため口には出さんが……。ハッハッハッ。

まあ、そんなこんなで仏教が廃れるの待つていたところ信仰そのものが廃れて外界での復活の機会を失うとは……。いやはや滑稽滑稽。

今、人里では山の神社や命蓮寺や神霊廟、そして博麗神社までもが信仰を争つてなんやかんやをしているが、この幻想郷において信仰というものは明治以前の状態であることを理解していない様だ。まあ、今更こういうことがあるのも解らんでもないが、所詮

人里等に住まう人間達はお祭り程度にしか考えてはいないだろう。

まあ、霊夢にその辺のことはその内時を見計らって伝えれば良いだろう。



店主謹製のコーヒーチエリーのパウンドケーキを堪能していると、カランカランと乾いたドアベルの音が店内に響いた。反射的に音のした店の入り口に目を向けるとそこには、煙管を片手に持ち眼鏡をかけた妙齡の女性…、人の姿に変化はしているもの、おそらく間違いなく古い友人であり恩人の姿があった。

「こんな表通りから離れた裏通りにこんな店が有るとはのう…。ん？其処のお主は…：常葉、かの？これはまた、珍しい者がいたものだ。息災にしておったのか。」

視線を向けていた此方に気付いたのか、怪訝に問いかけて、煙管をしまい、私の隣の席に座った。それに此方も言葉<sup>だんぞう</sup>を返す。

「久方ぶりですね、佐渡の団三殿。それにしても貴女程の者も此方に居るとは、遂に外の世界で忘れ去られてしまったのですか？」

「なに、儂が此方に来たのは鶴に呼ばれたのもありはするが殆どただの気まぐれじゃよ…、尤も、諏訪の神々程の神が此方に移っているのは驚いたがのう…。」

「まあ恐らく、あれだけ大きな祭があつても神を崇めるものであつたも形だけで人が楽しむためのイベントに成り下がり信仰は消えてしまつていたのでしよう…。」

「まあそんなところであろう…。それはそうとアレがお主の…」

「アレが何を指すか正確には判りませんが恐らくご想像の通りですよ？どうですか、あの子は？」

「一言で言えば、面白いのう。」

その一言に女は笑みを深める。

「積もる話も有りますし、とりあえずここは私が奢りましょうか？」

「お、そうかの？では相伴に預かるとしよう。実はまだ此方の持ち合わせは然程多くなくてのう。今ここにある福澤諭吉を額面通りに両替してくれば此方では晴れて大金持ちになって大助かりなのじゃが…。」

「流石に外と此処の一枚の価値が同じ訳がないでしょう。せいぜい五十銭か六十銭つてところでは？まあ、正確には判りませんので詳しくは両替商に聞いて下さい。それとも今ここにある私のデノミ前の一万ジンバブエドル札と交換しますか？」

「それは…洒落にならんの…。そもそもそれはこつちに入り込んでおるのか…。」

「それに此処は私のお気に入りなので勘定で葉っぱを出されても困りますからねえ…。」

「ホッホッホ、何のことかのお…。」

そう言いつつ此方から露骨に視線を反らす旧友を横目で睨む。

「それにしても切賃に幾ら持つてかれるかのう…。」

そう呟いてげんなりしている旧友を見て見ぬふりをしつつ店主に注文をする女、まあ、なんだかんだで旧交を温める二人？であった。